

三重県アセアンビジネスサポートデスク現地レポート

平成28年3月24日

三重県アセアンビジネスサポートデスク
株式会社野村総合研究所（NRI）

【ラオス】タイ+1の進出先として注目を集める

ラオスはタイやベトナム、中国などに国境を挟まれた内陸国であり、日本の本州ほどの国土面積に700万人弱の人口が住む。数多くの水力発電の適地に恵まれており、タイなど周辺国に売電している。

ラオスには13箇所の経済特区があり、特区の内容には工業団地、都市開発、リゾート・カジノ施設などが含まれる。首都ビエンチャン、南部のサバナケットやパクセなど人口の多い都市郊外にある経済特区は工業団地として開発されている。サバナケットとパクセの工業団地は日系資本が入った事業主体であり、日系製造業の誘致に奏功している。

ここ数年において、ニコン、トヨタ紡織、三菱マテリアル、アデランス、第一電子産業、旭テックなどがラオスに工場を新設している。特に、ニコンやトヨタ紡織などはタイ工場からラオスへの一部生産工程の移管であり、タイ+1展開の先例と言える。

タイに多く集積する日系製造業からタイ+1の候補地としてラオスが注目を集めている背景としては、以下が挙げられる。

第一に、タイの最低賃金は一日300バーツ（月25日労働として、約210ドル/月）であり、かつこの金額では日系企業が集中するバンコクから車で数時間圏内では雇用はままならない。一方で、ラオスの最低賃金は約110ドル/月であり、隣国カンボジアの約140ドル/月よりも安い。

第二に、タイとラオスの国境を流れるメコン川の国際架橋が4ヶ所と増え、またラオス側の道路整備も進んだため、両国間の物流が潤滑になりつつある。

第三に、タイ語とラオス語の近似性が高く、ラオス人日系企業がタイ工場で育てたタイ人をラオスでマネージャーとして活用できる。

もちろん、人口密度の低さから大量の労働者を一挙に雇用するのが難しい、基礎教育の水準がまだ低いなどの課題もある。しかし、既にタイに進出している日系企業が製造工程の一部を移す先としては、ラオスは有力な選択肢となりうる。

【カンボジア】発展するマイクロファイナンス

カンボジアはアセアンで最も大きなマイクロファイナンス市場を有する。マイクロファイナンスとは、主に低所得者や個人事業主、小規模事業者向けに融

資を提供する金融機関である。預金を預かれる機関が 7 社、預かれない機関が 33 社が存在する (2014 年末時点)。上位 4 社 (PRASAC、SATHAPANA、AMRET、HKL) で、総資産の約 70%が占められている。SATHAPANA はマルハン・ジャパン銀行の傘下であり、HKL はタイのアユタヤ銀行 (三菱 UFJ フィナンシャル・グループ) が HKL に買収されることが 2016 年 1 月に発表された。イオンマイクロファイナンスもマイクロファイナンス機関としてカンボジアに参入し、2015 年 11 月には銀行免許を取得した。このように、カンボジアのマイクロファイナンスは日系企業にとっても有力な投資先となっている。